

The Ushiku Times



NO. 30 Nov. 14. 2016

茨城県立牛久高等学校

校長室から

全国普通科高等学校長会北海道大会・第2弾

◎ 10月31日（月）～11月2日（水）に開かれた「第66回総会・研究協議会」の総会参加者は約500名、茨城県からの参加者は9名でした。

◎ 11月2日（水）研究協議Ⅱ ① 管理運営 ③ 生徒指導 ④ 大学入試 各研究委員会

② 教育課程研究委員会からの報告（茨城県担当・木口）

次期学習指導要領改訂に向けた教育課程の研究

～ 各都道府県の先進的なまたは特色ある実践事例を踏まえ、その実施と課題についての検討を進める ～

平成28年度・平成29年度主幹 茨城県（委員12名）

調査期間
平成28年6月中旬から7月下旬
全回答学校数 221校
(① 80校 ② 78校 ③ 63校)

《 3つの柱 》

①学習・指導方法の改善としての「アクティブ・ラーニング」の取組と課題

②探究的な学習活動を重視する「総合的な学習の時間」の取組と課題

③選挙権年齢引き下げに伴う「主権者教育」の取組と課題

3 「アクティブ・ラーニング」の取組と課題



4 「総合的な学習の時間」の取組と課題



5 「主権者教育」の取組と課題



まとめ「アクティブ・ラーニング」

- ALの開始時期
(平成27年度、平成28年度が大半を占める：82.2%)
- 「通常の授業にAL導入」の実践が重要
(「一斉授業」や「イベント型AL」から「通常授業型AL」へ)
- 教員の指導力向上のための教員研修が必要
(各都道府県教育委員会主催、管理職主幹、外部人材活用、先進校視察等によりALに対する理解を深めたい。)
- 施設・設備面の充実：学校により差
(理想的な授業を進めるために予算や時間が課題となる。)
- 「評価」では、「観点別評価」の実施が鍵
- ALの視点は「主体的・対話的で深い学び」の実現
(様々な課題があるが、ALに対して「一歩前へ」踏み出す)

まとめ「総合的な学習の時間」

- 外部機関や大学・事業所等との連携
(全県調査：52.9%。先進校視察、外部人材活用等は不可欠)
- 学校設定教科・科目の目標設定や授業構成が明確化
(生徒にとって、興味関心をもつ魅力的な授業へ)
- 課題
(教員意識、施設・設備面の充実、外部人材の活用)
(生徒のモチベーションの維持と更なる向上)
- 「総合的な探究の時間」→「総合的な学習の時間」
(今後ますます各学校の独自性が顕著となる。)
- 「魅力ある学校づくり」の一翼を担う

まとめ「主権者教育」

- 18歳の投票率が約51%（総務省調査）
(第24回参議院議員通常選挙：平成28年7月)
- 学校教育における取組の成果大
(生徒の意識深まる：各学校で模擬投票、模擬選挙等の実施)
(生徒の投票準備：授業に加え政見放送等で確認して投票)
- 今後の課題
(特定の教師に頼らず、学校全体で取り組む姿勢が大切)
(教科横断的な視点から、指導力向上のための研修が必要)

【牛久高校と並木中等教育学校におけるアクティブ・ラーニングの主な取組】

＜茨城県立牛久高等学校の取組＞

○アクティブ・ラーニング・フォーラム 2016

平成28年9月6日(火) 会場：本校(約900名参加)

- ① 羽根 哲也 氏：(株)アクティブ・ラーニング代表取締役社長
- ② 古新 誠 氏：敬福監修・コミュニケーションデザイナー
- ③ TATSUYA 氏：ビートボックス・パフォーマー



8人からのメッセージ：「自分のために一歩前に踏み出すこと」

○アクティブ・ラーニング公開授業

平成28年9月28日(水)

出席者：県内教職員・青森県教育委員会等、約100名



↑ 現代社会 (3年生) ← 生物 (3年生)

＜茨城県立並木中等教育学校の取組＞

●ALの実践上の課題

- ① AL型授業が形だけになっていない。
- ② アクティブ・ラーナー(能動的学習者)の育成という目的に向かっている。
- ③ ALが授業かという二項対立的な議論になっていない。
- ④ ベアワークやグループワークだけで学力は向上するの。

80字以内の文章を書くこと

① 2センテンスで書くこと

② 接続詞で結ぶこと

③ 思考力・判断力・表現力だけでなく読解力を養い学力向上につなげる

●「AL指数」を考案 (ALの実践率を示す指標)

例：50分授業でALを 5分実施→「AL10」

・50分授業でALを10分実施→「AL20」

・50分授業でALを15分実施→「AL30」

●「R80」(アールエイティ)を考案

・Rは「Rアクション(読者の声)」と「リストラクチャー(消場読)」